

Title	中国語を母語とする日本語学習者のスピーチスタイルに関する縦断的研究
Author(s)	田, 鴻儒
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59144">https://hdl.handle.net/11094/59144</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	田 鴻 儒
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 25004 号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	中国語を母語とする日本語学習者のスピーチスタイルに関する縦断的研究
論文審査委員	(主査) 教授 三牧 陽子 (副査) 教授 坂内 千里 准教授 難波 康治

## 論文内容の要旨

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、スピーチスタイルの選択の実態を縦断的に記述し、スピーチスタイルの習得の解明を試みたケーススタディである。本研究に至った問題意識は以下の通りである。スピーチスタイル（丁寧体／普通体、語彙（狭義の敬語／普通語など）の使い分け）は対人関係に密接に関わり、不適切な使用は相手に悪印象を与え、円滑な人間関係を支障をきたしかねない深刻な問題である。そのようなスピーチスタイルを相手や場面に応じて適切に使い分けることは日本語教育の中でも最も習得が困難な課題の一つとされている。特に、中国語は日本語のような敬語体系を有さないため、中国語を母語とする日本語学習者にとって、スピーチスタイルの持つ社会的・文化的な意味を十分理解し習得することは極めて困難である。しかし、従来のスピーチスタイルの研究は横断的調査に偏向しており、学習者のスピーチスタイルの習得のメカニズムやプロセスの究明を目指した縦断的研究はほとんど見当たらない。

このような問題意識と研究目的に基づき、下記のような調査を行なった。中国の大学で日本語を専攻してから来日した3名の学習者を調査対象者とし、学習者と年齢差の異なる3名の日本語母語話者との2者間初対面会話（《対上》、《対同》、《対下》）を一年にわたって3回行った。同時に、学習者のスピーチスタイルの特徴を浮き彫りにするために、比較対象として日本語母語話者の初対面会話も収録した。さらに、言語使用意識と日本語接触環境を把握するためのインタビューおよび、日本語会話能力を測定することを目的としたOPIテストも並行して行なった。このような方法で収集した資料を初対面会話データを中心として、スタイルとスピーチレベルという2つの枠組みから、学習者のスピーチスタイルの選択の様相、基準および縦断的変容について分析と考察を行なった。

具体的な分析と考察の結果は以下の通りである。

### (1) 文末スピーチスタイル（丁寧体／普通体）

文末スピーチスタイルの使い分けに関しては、各学習者間で個人差が大きいという結果となった。社会的要因、心理的要因と言語内的要因に注目して考察した結果、個人差を超えた習得の特徴が浮き彫りになった。

まず、日本語接触環境が学習者のスピーチスタイルの習得に大きな影響を与えていることが明らかになった。学習者C1は周囲の母語話者の言語行動を注意深く観察し、母語話者のそれと照らし合わせつつ、その都度自らのスピーチスタイルの選択基準を修正し、能動的にスピーチスタイルを習得していった。学習者C2は周囲の学生を観察し、同等の相手に対してはスピーチスタイルの選択に注意しなくていいという独自の規範を築き上げた。C3は日常の言語環境がそのまま彼女のスピーチスタイルの無標形式を決め、会話時のスピーチスタイルを左右していた。以上から、学習者全員が接触経験から影響を受けながらスピーチスタイルを習得していくことが明らかになった。ただし、学習者が環境から受けた影響の程度および様相はそれぞれ異なっていた。それは、学習者の認知・学習スタイルが密接に関係しているからと考えられる。例えば、C1は正確さを重視する「規則形成型学習者」であるため、周囲の母語話者の言語行動を注意深く観察し、それに照らしながら自らの選択基準を修正し、スピーチスタイルを習得していった。一方、

C3は規則を分類しようとし、流暢さを重視する「資料収集型学習者」であり、スピーチスタイルが完全にその時期の接触環境に左右されていた。この考察により、一口に日本語接触環境が学習者のスピーチスタイルに影響すると言っても、学習スタイルによって影響の受け方が異なりうることが示された。

次に、いずれの学習者も3期にわたって《対同》《対下》の会話相手（それぞれ学習者と同じ年、学習者より2～3歳年下）を同じく「同等」と認識していた結果により、学習者はスピーチスタイルを選択するに際して、母語の社会的・文化的・社会的言語的ルールから転移を受けていることが明らかになった。年齢による相対的上下関係の認識において、日本では数歳の差でも気にするのに対し、中国ではより幅広く世代差で捉えるという相違があるが、学習者は母語の規範に従い、大きな尺度、つまり世代で相手との人間関係を認知していた。

最後に、学習者に無意識的な言語使用が多いことが明らかになった。心理的要因（心的距離、注意の焦点、統語的な構造のかたまり「です／ます＋よ／よね」）と言語内的要因（デスが付加されない名詞文や形容詞文）により、学習者はしばしば無意識的にスピーチスタイルを使用していた。それが原因で、スピーチスタイルの選択基準と実際の選択が時折異なっていた。さらに場合によっては、規範意識と逆の基本的スピーチスタイルになってしまった。

以上の考察により、学習者の文末スピーチスタイルの習得は、日本語接触経験、母語の社会的・社会的言語的ルール、心理的要因と言語内的要因といった数々の要素によって影響を受けていることが明らかになった。影響を受ける要素の組み合わせや優先順位は学習者間で異なっているため、スピーチスタイルの習得に個人差が生じる。

### (2) 語レベルのスピーチスタイル（狭義の敬語、関西方言）

語レベルのスピーチスタイルに関しては、狭義の敬語と方言を取り上げ、それぞれの使用状況を記述した上で、習得について考察を行った。

狭義の敬語については、下記の4点が明らかになった。まず、学習者の敬語の使用数は全体的に少ない上、縦断的にも明確な変化は見られなかった。次に、会話相手に応じた使い分けの問題に関しては、母語話者の場合は、《対上》における敬語の使用数が必ず《対同》と《対下》より多く用いられていたのに対し、学習者には一定の傾向を見出せなかった。また、学習者の使用した敬語の内訳について分析した結果、認知的に簡単な言語形式が先に習得されることがわかった。学習者は3期にわたって、自己紹介の際に使われる「申す」を除き、動詞の敬語の使用はまったく観察されなかった。一方、接頭語・接尾語による名詞の敬語（「ご出身」、「お子様」などのバリエーション）は次第に増加していた。以上の結果から、接頭語・接尾語による名詞の敬語が動詞の敬語に優先して習得されることがわかる。この傾向は敬語処理の複雑さに比例する。接頭語・接尾語による名詞の敬語は、既習の名詞に「お、ご、さま、さん」を付けるだけで敬語になるため、記憶と変形操作が比較的容易である。その手軽さが表出につながり、習得を促進したと考えられる。一方、動詞の敬語は語彙形態（「おっしゃる」、「申し上げます」など）と文法構造（「お／ご～になる」、「お／ご～する」など）のどちらかを記憶する上で、さらに文法的な活用変形操作の手続きも必要のため、名詞の敬語より認知的負担が大きい。以上の理由から、動詞の敬語の習得が遅れていると考えられる。このように、記憶にかかる負担の大小と形態操作の難易度が学習者の敬語の習得に影響する。最後に、相手のことを聞く質問文において、母語話者と学習者の使い方が大いに異なっていることが確認された。母語話者は丁寧体と狭義の敬語を使用して相手のことを質問していたのに対し、学習者は丁寧体のみで質問をしていた。

以上、関西方言について明らかになったことをまとめる。まず、方言の受容意識については、学習者間で個人差が見られた。方言の響きが乱暴に感じてマイナスのイメージをいだいており、方言を学習したくない学習者がいる一方で、方言の発音がユニークと思え、好感をいだいている学習者もいた。分析を通じて、方言が話されるコミュニティに入って方言話者と直接接触すると、方言に対する評価が本来のマイナスからプラスに転じることが明らかになった。また、マスメディアが非常に発達している現代社会では、方言のイメージ形成がマスメディアによって大きく左右されることも示された。次に、方言の使用に関しては、滞在期間の経過につれて、学習者が方言形式を習得し、自らのスタイルに加えたことが確認された。最後に、方言の習得においては、狭義の敬語と同じく認知的に簡単な言語形式が先に習得されることが明らかになった。学習者が使用していた方言の項目は、「めっちゃ」「ほんまに」「しんどい」「やばい」「や」「やん」「で」であったが、「めっちゃ」は「非常に、大変に」、「ほんまに」は「本当に」の意の関西方言形式、「や」は断定の助動詞「だ」の関西方言形式、「やん」は共通語の「じゃん」にあたる。この結果により、学習者が方言を完全に新たな言語としてゼロから勉強するのではなく、共通語をベースにして、共通語に対応する項目、置き換えやすい項目を優先して習得することが明らかになった。

以上、文末スピーチスタイルと語レベルのスタイルに分けて本論文の知見をまとめた。これらの結果を基に、本論文が日本語教育に与える示唆について述べる。まず、スピーチスタイルの習得に関して、第二言語環境においても、自然習得だけでは限界があるように思われる。次に、母語の社会的・社会的言語的ルールが潜在的ながらスピーチスタイルの選択に影響している結果から、スピーチスタイルを教授する際に、母語を考慮に入れた指導が必要と思われる。また、学習者のスピーチスタイルの選択が心理的要因と言語内的要因により、無意識的な言語使用が多いこと

から、母語話者からの歩み寄りが求められよう。母語話者が学習者のスピーチスタイルの使用に寛容な態度を持つ必要性があると思われる。最後に、狭義の敬語については、習得が極めて困難であることが明らかになった。特に相手のことを聞く質問文は聞き手目当て性が非常に強いため、注意が必要と考えられる。敬語の指導においては、質問文を含めた「聞き手の領域」に重点を置いた指導法が効果的ではないかと考える。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は、中国語を母語とする上級日本語学習者3名を対象に、日本語のスピーチスタイルの選択の実態を来日直後から1年間にわたって縦断的かつ多角的に記述することによって、その習得メカニズムを解明することを目的としたケーススタディである。上級学習者の場合、スピーチスタイルの不適切な使用が、初級・中級学習者よりも厳しく留意され、円滑な人間関係に支障を来しかねない深刻な問題であるにもかかわらず、敬語体系を有さない中国語母語話者にとっては、会話相手との年齢差に応じた使い分けをはじめ、上級に至ってもその習得が困難であることが研究の背景となっている。

横断的調査に偏向しがちなスピーチスタイル研究の中にあって縦断的観点を取り入れたこと、方法論として初対面会話・会話テスト・言語環境・言語意識といった多様な観点から総合的にアプローチしたこと、文末（丁寧体・普通体）に加えて語レベルにも分析を広げたことなどが、本研究の特徴となっている。特に、3名の調査協力者については、性別や年齢、日本語学習歴、参加プログラムなどの条件を統制したうえで、諸条件を統制しやすい初対面会話を軸に据え、3期にわたって、それぞれ目上、同等、目下の日本語母語話者との2者間初対面会話を実施した。また、対照データとして日本語母語話者同士の初対面会話も同様の組み合わせで収集し、加えて、来日直後と1年後には会話能力を測定するために口頭運用能力テスト（OPI）も行う等、周到な研究方法に基づいた調査であることは、高く評価できる。

収集された膨大なデータの分析結果から得られた知見は多い。もっとも大きな功績は、文末スピーチスタイルに関して、心理的要因、言語内的要因、日本語接触環境、母語の社会文化的・社会言語的ルールの影響を受けて学習者は独自の規範を構築し、さらに再構築しながらスピーチスタイルを習得していくというダイナミックな習得のメカニズムと様相を実証的に明らかにすることに成功した点である。習得状況やプロセスに観察された大きな個人差が、これら要因の組み合わせや優先順位によってもたらされたとの考察も、詳細なデータに基づいているだけに説得力がある。また、従来指摘されることの少ない言語内要因に注目し、「マス／非マス」の選択に活用形の操作が必要な動詞述語文に対し、名詞文や形容詞文等では「デス」を付加するか否かという比較的単純な操作で丁寧体と普通体が産出され、「デス」が付加されない形でも意味伝達が達成されるという言語内要因が、母語話者と比較して学習者に特徴的な普通体へのスピーチスタイル・シフトの誘因となっていることを示した。このように、待遇性と関係なく出現する「デス」が付加されない普通体が初対面会話の自己紹介のやり取りの中で頻繁に観察されるのは、自己紹介においては個人情報の要求や提示が頻繁に生じ、ことに接触場面においては名前や出身地に関する意味交渉が集中する文脈を備えているためであり、その一方で、これが、会話相手に普通体を基調とする「コンテクスト化の合図」と解釈され、誤解を招くおそれがあるという指摘は、極めて興味深いユニークな論点を提供している。

全体にデータを十分活かしていない点はやや惜しまれるが、本研究はスピーチスタイル研究の流れの中で、確実な地歩を占めるとともに、日本語教育に対する示唆に富み、今後の展開が期待できる。

以上から、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認める。